

東アジア古代史セミナー 古代東アジアをめぐる国際環境

徳島大学総合科学部 アジア研究コース

徳島大学総合科学部考古学研究室、アジア史研究室、日本史研究室は、本学と学術交流協定を締結している韓国慶北大学校・中国武漢大学の協力のもと、国際学術セミナーを開催した。

日時；2001年2月20日（水）10：00～17：00

場所；徳島大学総合科学部 310 教室

日程；

I 研究発表

朱甫暎（慶北大学校人文大学史学科）

「新羅形成期の金氏勢力の成長の背景」

李熙濬（慶北大学校人文大学考古人類学科）

「服飾品としての新羅装身具」

牟発松（武漢大学歴史系中国三至九世紀研究所）

「漢～唐の国家と社会の関係について－日中学界における『六朝隋唐論』の比較を中心として－」

葭森健介（徳島大学総合科学部）

「華夷意識から見た古代東アジアの国際秩序」

中村豊（徳島大学埋蔵文化財調査室）

「庄蔵本（徳大構内）遺跡出土の無文土器系土器をめぐって」

東潮（徳島大学総合科学部）

「キトラ古墳壁画と新羅・唐文化」

丸山幸彦（徳島大学総合科学部）

「『評』の成立と展開－7世紀の阿波－」

II 討論

発表テーマは、新羅の国家形成と身分制、漢から唐代の国家論、飛鳥時代の中央と地方、阿波国の形成過程、新羅・唐と日本との国際関係などについて、考古学と史学からなる合同学術討論会となった。報告要旨はつぎのとおりであるが、一部論文名を内容にそくして変更している。なおこのセミナーの開催は、「外国人研究者招へい経費（学長裁量経費）」による。

漢～唐の国家と社会の関係について

— 日中学界における『六朝隋唐論』の比較を中心として —

牟 発松

1 問題の所在

六朝隋唐時代の特徴については、日本の「京都学派」「歴研派」、中国の「魏晉封建説」の間で各々異なった理解がある。日本の両派は歴史観、時代区分を異にしてきた。中国の「魏晉封建説」は時代区分論的には京都学派、社会経済の発展形態に注目する理解は歴研派にちかい。この違いは国家と社会の関係についての見方から生じる。秦の六国統一以来、前近代中国の基本は中央集権専制体制であった。その一方、専制国家権力も県レベル以下の基層社会に浸透することなく、国家権力の末端に位置する郷里組織も一貫して存在してきた。この点は魏晉に対する中日学界のほぼ一致した見解だが、国家と社会の関係をどう把握し、両者のどちらに軸を据えて理解するかについてはそれぞれ異なり、社会的側面重視、国家的側面重視の二方向にわかれる。

2 日本における六朝隋唐論

京都学派の創始者内藤湖南氏は六朝隋唐を貴族政治の時代とし、貴族が地方の名望家として永続したという社会的側面を重視する。一方国家的側面にも目を向け「唐宋変革論」などにおいて貴族政治から君主独裁政治への変化に言及する。京都学派の後継者である宮崎市定氏は内藤説を集大成し、川勝義雄・谷川道雄両氏も六朝隋唐時代の特質を分析する上で主要な視点を社会的側面に置いた。これにたいし、歴研派の前田直典氏は、唯物史観を基に漢唐間の大土地所有を古代的土地国有制であるとし、六朝隋唐を古代に位置づけた。この説は前田氏の死後西嶋定生氏が発展させる。その後論争を経て、西嶋氏は最終的には専制国家的側面に注目して漢唐時代の社会的性質を分析することになる。国家の側に視点をおく傾向は歴研派の集大成者である堀敏一氏に継承され発展・完成へとむかった。こうした日本の学界において専制国家と豪族の間、豪族と自営小農民との間、この三者と郷村共同体との関係についての問題は最重要の研究課題となる。谷川・川勝両氏は家族・村落に基盤を置く「豪族共同体論」を展開し、社会の側の視点から出発して国家領域に関する実証研究もおこなった。これに対して、矢野主税氏は貴族の官僚的側面に注目し「寄生官僚制論」を展開する。越智重明氏は君主権・官僚的側面に注目して貴族制の変遷に関して研究し、堀敏一氏も郷村共同体の実証研究をすすめた。結局のところこの郷村共同体も中央集権体制にくみこまれたと結論する。つまり日本では国家と社会との関係をめぐり「共同体と国家の関係とその性格」、「貴族制とその特質」といった問題が論

争の焦点となった。

3 中国における六朝隋唐論

中国においては陳寅恪氏の統治集団に重きをおく政治史研究がまずあげられる。氏はこととなった種族・家族・地域・文化・階層を背景として組織された統治集団についてとくに着目し、これらの統治集団の利害対立や興亡、分裂から、六朝隋唐史の展開を明らかにし、当時の複雑に絡み合った歴史事象の背景をさぐった。氏の『唐代政治史述論稿』などの一連の研究では、唐代前期の關隴集団と李武韋楊の婚姻集団、唐代後期の長安（天子）集団と河北（鎮將）集団、および外朝の士大夫朋党と内朝の宦官党派などの相異なる類型の統治集団同士の対立、興亡、分裂が叙述される。そして氏はとくに北朝隋唐史を一貫して理解するための鍵として「關隴集団」に注目し、優れた研究を展開する。氏の研究は中古の政治、文化、社会生活において長期にわたり支配地位をしめた門閥士族集団の興亡分裂の過程を終始追うところに一貫性がある。陳氏の研究は統治集団の階層のあらわれ方の多様性という点で社会的側面を重視するものの、政治的文化的機能についても目をむける。氏は中古の門閥士族が単に政治的に権力を振ったのみならず、学術、文化も重んじ、儒学およびその実践である礼法によってその家柄を維持していった点を強調する。

唐長孺氏の研究では門閥士族の研究が大きな比重を占めている。氏は他の魏晉封建論者と同様に後漢以来の地方封建勢力の発展展開を重視し、この現象を魏晉期の門閥制度の形成、農民の隷属民化の発展（自作農の封建化）と関係づけた。門閥士族の形成と変遷、門閥制度と中央集権専制主義の関係、国家と大族豪強および自作農の三者間の関係の諸点を研究の中心にすえ、「門閥専政」と「伝統的君主集権制」の間の矛盾、自作農の封建化の趨勢と封建的隷属民の無制限な拡大を抑制する国家の政策との矛盾について多くの精緻にして弁証法的な分析をおこなっている。近年の『魏晉南北朝隋唐史三論』においては更に社会経済構造、政治軍事制度、社会階層の興亡および思想文化の変遷などといった方面から、魏晉封建説についてあらたに論証をくわえた。なかでも門閥制度と貴族政権の形成について述べるさい、その特徴と中央集権との関係、南朝と北朝における門閥体制の差異、および隋唐間の門閥制度の衰亡や門閥大族が社会にあたえた影響などに着目している。

田余慶氏は著書『東晉門閥政治』でもおもに門閥政治と皇権政治の関係という角度から、門閥政治を皇帝権力と士族勢力及び士族勢力間においてある種のバランスのとれた状況と定義した。この門閥政治は皇権政治の変種であり、伝統的な中央集権体制の変遷の螺旋的な展開である。そしてこのような政治はわずか東晉百余年の間にのみおこなわれたとする。氏の研究は国家側に重点をおいているものの、門閥士族の形成過程、文化の様相、経済基盤、門閥政治の一時性と過渡的特徴について、それぞれ独自性に富む鋭い分析をしている。

中国学界の魏晉封建説は、文化大革命中にイデオロギー的な抑圧をうけたが、改革開放政策の後、何茲全、唐長孺両氏により、改めて系統的な研究がなされた。両氏は共に唯物史観を基本として社会経済的变化を重視し、封建的隷属民の賤民化と普遍化、都市や商品経済の衰退と自然経済の比重の上昇等を魏晉時代の性質の最も根本的な特徴と位置づけた。くわえて唐氏はこの時期にきわめて特徴的

な門閥大族階層の形成、貴族政治の出現、南北朝の社会的差異といった経済以外の分野についても全面的に研究を展開した。氏は陳寅恪氏の研究手法を継承し、魏晉南北朝に隋唐文化の淵源をもとめ当時の社会制度を分析する。さらに宋代理学の思想の発端を先行する唐代思想家のなかにもとめた。そして、魏晉南北朝隋唐の歴史の大きな流れをふまえ、複雑にいくんだ歴史現象を整理し、「唐代の南朝化」というきわめて新鮮で意義ぶかい命題を提起し論証した。これらの研究はいずれも中国学界における六朝隋唐論の中身を豊かにするものといえよう。

3 今後の課題

中日学界二国間の六朝隋唐論には、多くの点で相違がみられ、それぞれ課題をかかえている。社会的側面の重視という点では中国学界の研究は不足しており、専制国家と自作農の関係についてもまだ有効な新しい枠組みは構築できずにいる。日本の学界でも両学派同士の相互理解と相互参照によってより高度な理論的枠組みを構築する余地があろう。さらに日中共に西欧中世期との比較研究が不足しているのではないと思われる。今日中日両国間の学術交流の深化にともい共通の関心もうまれ、相互に議論するための基礎もととのった。今後は実質的な学術論争による双方の積極的なやりとりがもとめられよう。

(鶴原浩一、中田宏美、片山真希子共訳、鶴原要約)。

華夷意識からみた古代東アジアの国際秩序

葭森 健介

1 『漢書』地理志の記載法

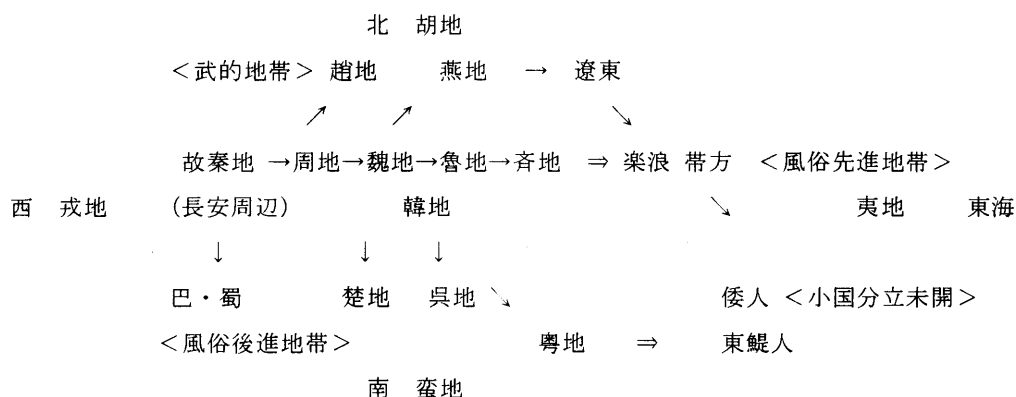
東アジア古代に関する文献資料として、これまで重視されてきたのは『漢書』『三国志』等中国の正史であろう。しかし、初期の正史は歴史の記録であると共に班固や陳寿、沈約等の歴史家の著作であり、著者独自の価値観に裏打ちされる。これは東アジアについての記載にも当てはまる。たとえば、正史の中で「倭人」の名が初めて登場する『漢書』地理志も単なる地誌を記した書ではない。地理志の前半は『尚書』禹貢の文をはじめとして、周の爵制、春秋戦国の群雄割拠から秦の統一をへて漢の武帝に至るまでの地方支配の沿革が述べられる。その上で、漢の地方行政区画と戸口、各地域の風俗と同時代の状況が記述されるのである。倭人について記す「樂浪海中に倭人有り」という文もその風俗に関する部分に登場する。そもそも風俗について記載したのは皇帝の支配が徳によるものであり、その徳に人民が教化されるべきであるとの理念を示すためである。すなわち、『漢書』地理志には漢の皇帝の支配が夏王朝以来の伝統を継承し、天下の隅々まで其の版図とし、周辺の国家にまでその威光と恩徳を及ぼしているという華夷意識に基づく世界観がはっきりと読みとれる。

従って中国とその周辺諸国の風俗について記す部分も礼教的価値基準によって貫かれる。その基準により中国内地は大きく3つの文化性を持った地域に分けられる。文化の中心は皇帝が君臨する都長安等の秦地である。ここは周の発祥地で文王・武王の徳化により民はよく働き豊かであったが、漢以降全国から旧貴族、高官の子孫、資産家が移住させられた結果各地の悪い習俗が入り込み風俗も乱れたとする。このように本来優れていた風俗を有していたにも関わらず、時代と共に廃れた土地として記載されるのが魏地、周地、斉地、魯地という中原を東西に横切る地域である。これに対し、中原の北側の位置する趙地、燕地については元々文化的基盤があった訳でない。文より武を重んじ乱暴者はびこる土地柄として描かれる。趙地では男だてを気取って遊びほうけ、悪巧みに長け、乱暴者、泥棒が多くて統治しがたい。それは「迫りて胡寇に近」く、北方異民族との接触によってこうした気風が生じた。この評価は燕地、特に任侠の気風に富むとされる今の北京に当たる薊の地についても大差ない。その外辺に当たる遼東に至っては「地廣く民希れなり、數しば胡寇を被り、俗は趙、代と相い類す」と風俗の極めて劣る地とされる。また、長江流域以南の楚地、呉地、粵地についても中原地帯から離れ、もともと礼が十分行われていなかったところから漸く文化的に開けつつある土地柄として描かれる。そこは土地が豊かであるために農業技術も後進的で、且つ怠け者で働かず、迷信深い、ただ、その君主は任侠の風がありそれが民間に及んでいるとされる。この様に中国内地でも中心部の中

原を東西に横切る地域をもともと文化性の高い地、北が乱暴で淫乱な地、南を風俗未開の地と記す。そこには中心をより高く評価する中原文化中心主義の華夷意識が垣間見られよう（下図参照）。

3 『漢書』地理志における東夷

東方の周辺民族東夷は『漢書』地理志では北方の燕地に付属する形で記載される。ところが、朝鮮半島の玄菟、楽浪の風俗の評価は燕地とは正反対である。そこは殷が衰えた時公子の箕子に移り住み、その民を礼儀によって教化し農業・機織りを教え、法ではなく礼によって治められていた伝統がある。ところが燕地の遼東から官吏を採用してから風俗が乱れたと記す。風俗の乱れた燕、遼東のより外側に道徳的な土地があるというのは中原文化を中心とし、周囲を低く見る記載方法とは矛盾する。ただ楽浪・玄菟の風俗の記述を中国内地と比較するならば、魏地、周地、斉地、魯地と中原を東西に横切る地帯の記載方法と一致する。つまり、こうした文化先進地ベルトの延長線上に楽浪が位置付けられていたと見るべきではないだろうか。このルートは海を通した東西関係を念頭に置くと理解しやすい。つまり『論語』の孔子が「設もて海に浮び、九夷居らんとす」と述べたという記事を地理志が引用する点に注目すると朝鮮へは海によって魯地・斉地と繋がっていたとも考えられる。しかし、楽浪の更に先に住む倭人についてみると「分為百餘國、以歲時來獻見云」とのみ記され、風俗の評価はない。但しこの記述が会稽海外の東鯤人の「分為二十餘國、以歲時來獻見云」という記述と寸分も変わらない事は注目に値する。この記述を比較する限り倭人は中国南方と同じ範疇に位置付けられていたと考えられよう。すなわち、以下に図示する通り、記載順序で見ると東夷は燕地→遼東→楽浪・玄菟→倭人の順になるが、風俗の記載内容からすると、長安（秦地）→中原（周地）→魯地→斉地⇒楽浪玄菟、楚地→呉地⇒東鯤・倭人という文化伝播ルートが想定されていたと想定しうる（⇒は海上ルート）。



この朝鮮半島の文化を燕地より高く評価するという見方は、『史記』朝鮮列伝、『漢書』朝鮮伝にも貫かれている。この列伝は衛満が燕から亡命して朝鮮王となった時から武帝が衛満の孫の右渠を平定して楽浪・玄菟等四郡を置くまでの経緯が記される。列伝中この地の混乱の原因は朝鮮の民でなく、燕からの移住者との認識が読みとれ、班固は位置的には遼東より遠い朝鮮を地理志同様風俗的にはそ

の外縁に位置付けてない。つまり、『漢書』の東アジアの周辺国家に対する華夷意識としては長安→中原→燕地→遼東→朝鮮→倭人という同心円では理解しがたいのである。

3 『三国志』魏書東夷伝倭人の条の記載

『漢書』は志で風俗を記し列伝で政治的な関係を記していたのに対し、『三国志』東夷伝、特に「魏志倭人伝」と呼ばれる東夷伝倭人の条は①倭人が建てたそれぞれの国の位置とその国の制度、②倭人の風俗、③邪馬台国を中心とする政治動向や魏との関係がまとめて記される。『漢書』では①②は地理志に当たる内容、③は『漢書』朝鮮伝の記載方法に酷似する。当然の事ながら同じ『三国志』の中心となる魏・呉・蜀の人物列伝には①や②の内容はない。すなわち、『三国志』には志がないということとも関わり、東夷伝は内容的に『漢書』の地理志にあたるものと列伝を組み合わせたものといえよう。中でもかなりの分量をしめるのは②の風俗についての条項である。まずa)「男子皆露紒，以木縣招頭，其衣横幅，但結束相連，略無縫，婦人被髮屈紒，作衣如單被，穿其中央，貫頭衣之」「皆徒跣」「食飲用簋豆，手食」等の服飾、器物について、b)「其風俗不淫」「其會同坐起，父子男女無別，人性嗜酒，見大人所敬，但搏手以當跪拜」「及宗族尊卑，各有差序，足相臣服」等の家族（親子夫婦）、君臣秩序について、「其死，有棺無槨，封土作冢，始死停喪十餘日，當時不食肉，喪主哭泣，他人就歌舞飲酒，已葬，舉家詣水中澡浴，以如練沐」「其俗舉事行來，有所云為，輒灼骨而卜，以占吉凶，先告所卜，其辭如令龜法，視火坼占兆」等の祭祀についての記載がある。こうした服飾、飲酒、席次、拝礼、葬礼は礼制度の根幹をなすものであり、中国内地の場合正史では礼志、輿服志等にまとめられている。「種禾稻、紵麻，蠶桑、緝績，出細紵、縑絲，其地無牛馬虎豹羊鵲」「出真珠、青玉，其山有丹，其木有柁、杼、豫樟、檟櫨、投櫃、烏號、楓香，其竹篠簞、桃支，有薑、橘、椒、藟荷，不知以為滋味，有獼猴、黑雉」の産物は『漢書』では地理志に書かれていた内容であり、「收租賦，有邸閣國，國有市，交易有無，使大倭監之」という流通については食貨志に、「自女王國以北，特置一大率，檢察諸國，諸國畏憚之，常治伊都國，於國中有如刺史」等という政治（官僚）制度は百官、職官志に記載される内容である。すなわち倭人の風俗記載は正史の「志」の部分に相当する項目を基準に記した部分と考えられよう。つまり、陳寿は礼を尺度として倭国の風俗の情報を整理し、その価値基準にもとづいて「魏志倭人伝」を書いていたのではなかろうか。

ただ、邪馬台国の風俗の内容を見ると豊かで素朴ではあるが礼がまだ実行されない未開の土地、つまり「男子無大小皆黥面文身」と中国南方の風俗と相似する記述が目立つ。これは陳寿が倭人について『漢書』地理志の記載をふまえ、倭人が呉地の東にあったと想定し、その前提の下に記述した結果とは考えられないであろうか。それ故『三国志』東夷伝の記載では邪馬台国の位置が日本の南方にならざるを得ないのである。つまり陳寿が『漢書』に起源を持つ燕地→高句麗、中原→百濟、江南→倭という華夷意識を下敷きに『三国志』を書いたとすると様々な記事の説明が付く。日本の魏志倭人伝への興味は部分的な記述に偏っているようだが、陳寿がどのような方針、特にその華夷意識によってこの列伝を書いたのかという点にも目を向けなければならない。これは、日頃『三国志』をはじめ中国の正史を基本史料として研究を進めている中国史研究者の素朴な感想である。

新羅国家形成期の金氏族団の成長背景

朱 甫 暉

新羅史の体系的な理解のために至急解明しなければならない課題の多くは、現在初期史に集中しているとみてもよいだろう。そのなかでもっともおそく慶州に定着した金氏族団がどのような背景下でどのような過程をへて先住する競争勢力の朴氏および昔氏族団を制圧し、最後の勝者となったのかという問題は、これまでその重要性にたらずしてあまり関心がはらわれていなかった。本報告では辰韓連盟体の盟主であった斯盧が主動して新羅を成立させた過程をとおしてそれを検討してみた。

初期新羅史にたいする研究が進んでない理由としては、なにより文献上の信憑性の問題ということあげざるをえない。したがって、それをあつかおうとするとき、まず『三国史記』の初期記録について自分なりの立場を明らかにしておくことが不可避である。筆者は王系、紀年、記事の内容の三者を同一体としてあつかうのではなく、それぞれをわけてその結合過程を理解することがのぞましい接近方法であると考え。そのようにみると、王系と紀年はすくなくとも統一新羅期になって一つに結合し、現在のような形に確定したのであり、王系を後代の造作とみる虚構論は成立しがたいと論断した。統一新羅期に一統三韓という支配イデオロギーを創出して、三国が元来同族であったことを強調した。また高句麗と百済の建国紀年にくらべておくれていた新羅の建国紀年をさかのぼらせる現実的な必要性から若干の紀年造作がくわえられているが、朴・昔・金の三姓が相次いで尼師今を継承した事実自体は実情をそのまま反映したものと解釈した。これら三姓族団はそれぞれ斯盧国を構成する邑落であり、それらが順序どおり政治的中心地である国邑になった。尼師今はまさにこのした邑落国家斯盧国の首長であって、のちの新羅国王の呼称である麻立干とは根本的な性格がことなるものである。

もっともおくれて慶州に進入した金氏族団が最後の勝者となり、ついには麻立干体制を成立させることになるのは、それなりの背景があったはずである。第一に仇道という特出した人物が出現して軍事的な活動でおおしく成功をおさめたという点である。おそらくこれをとおして金氏族団の位相が大きく向上したものとみられる。それを基盤として昔氏族団をおさえて、ついに政治的勝利を謳歌することができるようになるのである。

第二に金氏族団が政治的に成功をおさめるのは、黄金が経済的基盤としておおしく作用していたという事実である。金氏族団が黄金と関係することは、始祖神話や姓氏の使用、積石木槨墳出土の宝物の事例などからよくしられていることであるが、そのおもな産地は仇道が掌握した地域と密接な関係があった。仇道は義城をはじめとして尙州など、おもに慶北北部地域の小白山脈方面で活動

した。とくにその活動の根拠として機能した義城には召文国という名称の邑落国家が位置していたが、召文は金という意味であり、ここは新羅の有力な金産地と判断される。そのためのちに金城とよばれることもあったのである。

そのいっぽう義城が小白山脈の外郭から慶州地域に入っていくさいに經由しなければならない重要な要所であった点が注目される。金氏族団がこの地域を掌握することによって高句麗による楽浪・帯方の滅亡以後発生した大量の流移民が小白山脈以南地域に入ってくるとき、かれらを確保することができたのである。かれらのなかに金銀をあつかう工人が含まれていたことはもちろんである。彼らをとおして金氏族団は金鉱を開発して金銀製品を細工することができたのである。4世紀中葉ごろ、新羅ではじめて完熟した金銀品が出現することはこのような事情を立証してくれる。ようするに仇道による金氏族団の軍事的な成功とともに金銀の産地および細工技術者の排他的確保は、かれらが急成長するおもな基盤として作用した。とくに4世紀中葉に昔氏集団との対決で勝利することによって金氏族団は事実上斯盧から新羅への転換において主導的な役割をはたすこととなるのである。

金氏が経済的な基盤を確保して持続的に勢力を維持していくことができたのは高句麗の援助がおおきい。高句麗は新羅が4世紀に国際舞台に初めて登場する手引きの役割をはたした。とくに400年加耶と倭の攻撃をうけて新羅が危機に陥ったとき、それを救援するため洛東江流域に南征し、それ以後にも高句麗は継続して新羅に軍事力を駐屯させながら、政治的影響力を行使した。おそらく軍事的なことだけが駐屯のおもな目的であったとは考えられず、経済的な反対給付がともなったものと推測される。高句麗は新羅と最初に交渉して以来、継続して属民と認識していたが、そのような関係は貢納を媒介に持続された。新羅が高句麗に納める貢納物のなかにはさまざまなものが想定されるが、主要品目として金銀をあげることができるのではないだろうか。新羅が4世紀のある時点に高句麗と関係をむすぶさい、金氏族団が主導的な役割をはたした。かれらが確保した金銀はそれを維持するための主要な機能をはたしたと考えられる。

このように金銀は、金氏が新羅内の他の族団にたいする優位を掌握することだけでなく、進んだ高句麗との関係を維持して自らを中心とした支配体制を構築するのにも重要な経済的基盤として機能した。高句麗は新羅を属民として認識すると同時に、金銀を貢納としてうけるその反対給付として、政治的軍事的な援助とともに先進文物を提供したのである。新羅が鉄を媒介とした楽浪中心の交流関係から、金銀を媒介とした高句麗中心の国際秩序に積極的に参与して成功することができるようになるのは、金氏族団が開発して確保した金銀のためであった。新羅支配集団である金氏がそれを姓氏として使用することはけっして偶然ではなかったといえよう。

以上が本報告であつたおおまかな内容であるが、考古資料についての全般的な理解だけでなく初期の記録自体についての体系的な分析がともなってはじめてその実情にきちんと把握することができると考える（谷川真基訳）。

4～5 世紀における新羅古墳被葬者の服飾品着装定型

李 熙 濬

最近の新羅装身具にたいする研究はこれまでの研究傾向とことなり、それを着装威勢品と認識して研究することによって、麻立干期新羅の地方支配などの政治的側面を考古学的に解明するのに重要な進展をもたらした。しかしその過程で社会的側面は相対的になおざりにされた。そのため本報告では着装威勢品をさらに服飾品と認識し、そのような研究成果をふまえて慶州はもちろん洛東江以東各地の 4～5 世紀の新羅古墳被葬者が着装した状態で出土した服飾品（帯冠・冠飾・冠帽・太環耳飾・細環耳飾・帯装飾具・大刀・頸飾・釧・指環）の共伴関係を全面的に分析し、主たる定型を抽出して、その解釈をつうじて当時の新羅社会の重要な一側面としての服飾制度の基本構成と制度的基盤を推論しようと試みた。

慶州古墳で共伴関係がそれほど定型性を示さない冠類をのぞいた服飾品の共伴関係によって着装服飾群を設定すれば、つぎの 12 群にわかれる。

- A 群（細環耳飾＋大刀副葬）
- B 群（太環耳飾）
- C 群（細環耳飾・大刀）
- D 群（太環耳飾・頸飾）
- E 群（細環耳飾・鍔帯）
- F 群（太環耳飾・鍔帯）
- G 群（太環耳飾・鍔帯・頸飾）
- H 群（細環耳飾・鍔帯・大刀）
- I 群（太環耳飾・頸飾・釧＋一部鍔帯あるいは指環着装）
- J 群（細環耳飾・大刀・頸飾）
- K 群（太環耳飾・頸飾・鍔帯・釧・指環＋大刀副葬）
- L 群（細環耳飾・大刀・頸飾・鍔帯・釧・指輪）

ほぼ A 群から L 群になるにつれて高い位階群の性格をおびる。地方古墳ではやはり冠類をべつにすれば、これと同一な共伴関係をもつ対応群である d・e・g・h・j 群にわかれ、慶州の最高位階群と下位位階をのぞく中上位の服飾群をしめす。

そこでしめされる主要定型をみれば、第一にもっとも基本になる服飾品である耳飾は細環耳飾と太環耳飾にわかれるが、すべての服飾品着用者がそのうちの 1 種類を着用し排他的あるいは対応的

共伴関係をしめす。耳飾のほかに頸飾から指環にいたる頸以下の身体部位のすべての服飾品を着装する慶州の最高位階服飾群（K・L）とそのすぐ下位群（J）をのぞいて細環耳飾は大刀、太環耳飾は頸飾と共伴する対応の関係が基本をなす。これは地方古墳でも同じである。第二に慶州古墳の被葬者で冠飾付帽冠と金属製帽冠を着装する例はない。第三にそれに反して地方古墳では帯冠は太環耳飾着用者のばあいほぼ副葬され、細環耳飾着用者のばあいは着装される。冠飾付帽冠は着装するばあいが圧倒的多数であるが、かならず細環耳飾着用者でかつ鍔帯を着装する例にだけあらわれ、帯冠とは共伴しない。

細環耳飾は男性、太環耳飾は女性をしめすものと解釈されるため、上記の12の群はA・B、C・D、E・F、G・H、I・J、K・Lの6群の男女対応服飾群にそれぞれまとめることができ、これらはA・CからK・Lになるにつれて、新しい服飾品を一種類くわえたり他の服飾品に代替したり、もしくは下位の服飾群を統合したりという累層的・段層的構成をもつ。また検討対象の古墳が約150年間の長い時間帯にわたるものであるのに、そのような定型をもつばかりでなく、中央と地方の区分なく一定の定型をしめしており、なんらかの固定的制度の存在を示唆するものといえる。それはすなわち服飾制度と推論される。

当時の服飾制度は一部装身具についての副葬定型の研究でよく推論されるように冠等制に直結するものではなく、身分制を基盤とするものである。ただ慶州古墳での6群の対応群はそのまま身分制内の段層に対応しない。A・B群とC・D群が一つの群として統合することができ、E・F群とG・H群もそのようにできる。I・J群とK・L群もまた一つの群に統合することができるので、全部で3つの群として身分制内の三つの段層に対応すると推定される。すなわち4～5世紀の新羅のばあいで耳飾以上の服飾品を着装する身分層はその内に3段階ほどの段層をもっていたと推定される。同一の身分制の規制下にあったとみることができない地方のばあいは、このような制度が準用されることはあったが、中央の服飾群にくらべて多少低い中上位服飾群を中心とする。これは当時の慶州支配層が地方にたいしてもっていた差別意識の反映である。そのかわりに鍔帯を着装する成人男性被葬者中の圧倒的多数が冠飾付帽冠を着装している。これは彼らが、頸以下の身体部位の服飾は慶州にくらべて低い位階であるとしても、首長層であることを象徴する意味がとくにつよい頭部服飾品と推定される（谷川真基訳）。

キトラ古墳壁画と新羅・唐文化

— 四神と獣首人身十二支像をめぐる —

東 潮

奈良県高市郡明日香村に所在するキトラ古墳の墓室内部の撮影調査によって、1983年に玄武、1999年に白虎と天文図、2000年に朱雀、そして2002年になって獣首人身十二支像が確認された。かつて人物らしき像の存在することも一部でいわれていたが、その人物像は獣首十二支人身像であった。本報告では四神図、とりわけ白虎と十二支図像の系譜についてふれる。

高松塚古墳の青龍・白虎図像のいずれも、尾が左後ろ脚にもぐるように表現され、その構図が、正倉院の十二支八卦背円鏡の図像と類似し、8世紀代のくだる可能性などが指摘されていた。

同じ構図の白虎が、中国の陝西省咸陽の蘇君墓の壁画にみられる。蘇君墓は、墓誌の蓋（「大唐故蘇君墓誌銘」）が遺存するだけであったが、宿白1982（「西安地区壁画の布局和内容」『考古学報』1982-2）によって、唐の大將軍の蘇定方に比定されている。蘇定方（592～667）は左驍衛大將軍で、白村江の戦い（660年）においても、唐の將軍として参戦し、そのことは、『日本書紀』の斉明紀にも記されている。

その蘇定方墓（全長73m）の斜坡墓道とよばれる長さ52.5mの墓道の東西壁面に青龍と白虎が描かれている。当時の初唐期に流行した図像で、高句麗の6世紀末から7世紀前半代の江西大墓（平原王陵）や中墓の画風と差異がみられる。

黄文連本実（本実）は、高句麗からの渡来系氏族であり、高句麗の平壤城時代に流行していた図像を周知していたはずである。ただ現在知られる高句麗壁画墳のなかで、四神図としては江西中墓がもっとも後出し、7世紀前半と推定される。江西大墓はその以前で、平原王（在位559～590年）に比定している。したがって黄文連本実（本実）が知っていた四神図像は、江西中墓に描かれた様式であったにちがいない。その玄武も立ち上がった状態の立像であり、高松塚古墳やキトラ古墳の図像とことなっている。

斉明10（671）年3月に、黄書造（連）本実（本実）が水ばかり（水準器）を献上している。その四月には、漏刻が設置されている。その本実（本実）は、遣唐使に随行し、天智10年に帰国した。薬師寺の仏足石（図）ももたらしている。また大宝2（702）年の持統喪儀の作殯宮司、慶雲4（707）年の文武の殯宮に供奉し、葬儀の御装司として、葬儀の威儀を司っていたという。黄文連本実（本実）もしくはともに入唐した画師によって、670年前後に流行していた壁画構成や画風・画法が将来され、四神図像の粉本も入手していた可能性が大きい。

また薬師寺薬師如来台座の四神図のなかで、玄武像はキトラ・高松塚・八卦鏡と共通する。これらは7世紀後半から8世紀初頭の白鳳期に共通するモチーフである。薬師如来台座の図像の系譜関係が問題となるが、薬師寺の伽藍などは、新羅仏教の影響を受けているが、唐と新羅文化に多くの共通性も

みられる。

つまり白虎・青龍の図像は、蘇定方墓→キトラ古墳→高松塚（薬師寺本尊台座）→正倉院八卦鏡というように変遷したと想定される。キトラ古墳の白虎像に、7世紀後半代の蘇定方墓のような画風の影響でみられるのである。カメラのアングルの関係で、ひずみのある画像ではあるが、図像の構図、表現法などから、そのようにかんがえられる。

高松塚古墳とキトラ古墳の壁画では、人物群像と日象。月像部図の表現や配置に大きなちがいがみられる。高松塚古墳壁画では、男女の人物群像の東西両壁に描かれていたが、キトラ古墳では獣首人身十二支像であった。

北壁に2体、東壁に1体が確認された。東壁に描かれている点や、東壁の十二支像は右衽の袍を着て、裳裾に赤色の飾縁が表現され、笏のようなものを両手で持つ。位置関係や図像の特徴から「寅像」のようである。北壁の像は2体とも長手のものを持つ。「子」や「丑」にあたる。

キトラ古墳や高松塚古墳の四神図の青龍や白虎の図像は唐蘇定方墓（667年）のものに類似し、正倉院八卦文鏡の図像につながる。朱雀も、唐の中宗の第三子である節愍太子墓（710年）の鳳凰文に類似し、当時唐で流行していた画風をとり入れたことがわかる。天文図は、7世紀末の高句麗に存在した天象図にちかい。7世紀代に高句麗や百済から伝えられていた天文図であるが、あらたに四神図像とともに唐から受容した可能性もある。

高松塚壁画のような人物群像は、6世紀後半の北朝時代に表現されるようになり、隋・唐壁画で発達する。そしてほぼ同時に四神図像は墓室内に表現されず、墓道の墓門近くの東西壁に描かれるようになる。辟邪の性格をもつ。唐代でも墓室内に四神図の描かれる例もあるが少ない。キトラ古墳や高松塚古墳で、墓室四壁に四神図が描かれているのは、7世紀代に高句麗や百済から伝えられた四神墓室壁画の流れにあったからにほかならない。

中国において、山西省太原にある北朝の婁叡墓（562年）の墓室の上欄（梁）に十二支図が表現されているが、獣形である。真北に鼠、真東に兔が配列されている。

隋代には獣首人身十二支像の陶俑が出現する。湖南省湘陰県城関鎮で発見された、隋の大業6（610）年墓は、墓室に羨道のつく・室墓で、獣首人身十二支像が墓室の東西両壁につくられた12の小さな龕に置かれていた。また墓誌に十二支像や四神図が彫刻されるようになるが、十二支像のばあい獣形が多い。

近年、遼寧省朝陽市黄河路唐墓で、唐（8世紀前半ごろ）の十二支の人身獣首俑が墓室内でみつかった。その寅像の表現はキトラ古墳のものに似ている。同じ唐代の陝西省西安の高元珪墓（756年）の墓誌には獣首人身の十二支坐像が線刻されている。

唐の壁画にも、陝西省乾県靖陵（皇帝僖宗、889年）の墓室・甬道の壁龕内に十二支獣首人身像が表現されている。後の遼代壁画になると類例がみられるが、唐の末期に存在することがわかった。靖陵の壁画では、墓室天井頂部に天文図、北壁に侍臣図、墓道壁に青龍、儀仗衛・牽馬、甬道に執戟武士図が描かれている。

いっぽう新羅の慶州龍江洞古墳の石室内で、青銅製十二支像がみつまっている。7世紀半の石室墳

である。8世紀代になると、そうした十二支像は、王陵や王権の守護神として、墳丘まわりの列石の石造物として装飾されるようになる。8世紀後半には武服の十二支像が主流となる。奈良の那富山墓の十二支像もそのころ伝わったのであろう。

四神は方位、十二支像は時（十二時、十二生肖）の神が表象されたものである。辟邪の意味をもつ。隋唐の墓室内では被葬者を守護するために、墓誌に四神や十二支像（獣形）が彫刻された。8世紀代には獣首人身像へ変化し、十二支陶俑が副葬され、壁画にも描かれるようになる。隋唐の墓室内では被葬者を守護するために、獣形から獣首人身像にかわった。

キトラ古墳の獣首人身十二支像と高松塚古墳の人物群像を比較しておもうことは、後者の壁画様式は、7世紀後半から8世紀前葉の盛唐期のものである。702年に再開、704年に帰国した遣唐使によってもたらされた可能性がある。

唐様式である四神図像は、その以前、唐あるいは新羅、あるいは新羅をつうじて唐から受容した様式と推定できる。新羅で四神壁画は未発見であるが、瓦当文様には青龍・白虎などの四神図像がある。新羅北辺の慶尚北道栄州に築造された於宿述述干墓（595年）では人物像が表現されている。

飛鳥時代には高句麗僧・画師、百濟僧観勒がもたらした天文学、四神思想がある。そうした基層文化にあたらしく新羅・唐の文化を受容したのであった。

キトラ古墳の十二支像は、日本・新羅・唐という国際環境を浮きぼりにしてくれる。7世紀末から8世紀にかけて、「白村江の戦い」の敗戦をへて、669年に遣唐使がとどえるが、新羅との通交は活発となる。元薬師寺・大宮大寺などの新羅系寺院の双塔式伽藍、飛鳥苑地と慶州雁鴨池の系統関係、藤原京の造営と新羅王京との関係、近江の瀬多橋と慶州月精橋の橋脚構造の共通性にみられる建築・土木技術の移転、新羅土器の分布と新羅系渡来人、正倉院文物にみられる新羅系文物など、新羅との国際関係が緊密であったことがわかる。

註

1) キトラ古墳壁画について、『奈良新聞』に掲載されたが、そのさい人物図像の衿が右衽であることについてふれた。2002年の4月のある日、佐原真さんから、その確認の電話があった。

東京での追悼式の日、わたしは平壌に飛びたった。水山里古墳などの壁画古墳を見学し、民俗博物館で、高句麗壁画人物像の衣服復元の陳列コーナーを前に、電話のことをおもいだした。

1)「キトラ」という地名は、「北浦」からなまったものである。地名学的に大矢氏も指摘されていた。1983年に玄武が発見されたころ、当時奈良県教育委員会の文化財保存課に勤務して埋蔵文化財の業務にたずさわっていた。新たな遺跡の見つかりと、遺跡発見届の提出が義務づけられている。その名称は「亀虎古墳」となっていた。遺跡の名称としては適宜でないため、再検討してもらったことが思いだされる。キトラ古墳壁画には四神が描かれていたのである。朱雀が確認されるまで、20年を要した。いまや高松塚古墳で不明であった朱雀が確認され、四神図であることがあきらかとなった。事務的に処理しないでよかったと痛感している。

評の成立と展開

— 七世紀の阿波 —

丸山 幸彦

はじめに

7世紀中・後期の阿波地域の政治状況について、当時の東アジア世界の動向をふまえ、とくに地方行政組織としての「評」の形成と展開ということを軸に報告する。

1 七世紀中・後期の日本列島

イ 評制をめぐる

評は律令制地方行政組織としての国・郡・里制度のうち、郡の前身にあたる組織である。『日本書紀』大化二年（六四六）春正月詔の第二詔に「初修京師、置畿内国司・郡司・関塞・斥候・防人・駅馬・伝馬、…凡郡以四十里為大郡、三十里以下四里以上為中郡、三里為小郡、其郡司並取国造性識清廉堪時務者為大領・少領、…」とあり、国・郡・里制がこの時点で確立されたと記されている。

評という組織は郡の前身であることが明らかにされていたので、かつては、この詔の記事から評は大化以前の地方行政組織であり、それが改新により、郡に移行していたと考えられていた。書紀の内容とくにこの詔への疑問は、すでに第二次世界大戦以前の津田左右吉以来だされていたが、後に藤原宮より関係木簡が大量に出土し、評は大宝二年（七〇二）の大宝律令まで存続しており、郡はそれ以降の組織であることが明確になった。

ロ 六四〇年代の政治動向

六世紀末以来の一〇〇年間の東アジアの歴史について、そのなかから律令制的古代国家群が形成されてくる、戦争と内乱の周期として位置づけるという石母田正の整理がある。石母田によると、この間に三つの大きな波があり、六四〇年代は二つめの波の時期である。すなわち、唐の高句麗侵攻に伴う東アジア情勢の緊迫のなかで、それが引き金になり中大兄によるクーデター（乙巳の変あるいは大化の改新）が起こされる（六四五年）。このように、六四〇年代は大きな変動の時期であるが、その具体的な様相は日本書紀の孝徳期の記述に潤色が多いだけに謎が多い。ただ、郡の前身としての評が姿をあらわすのは、孝徳期においてであることについては、諸説一致している。

この評という組織は朝鮮諸国で採用されていた地方行政組織のあり方を導入したものとされている。東アジアの情勢の緊迫化のなかで、国家建設を急ぐ当時の日本の指導者が先進国である朝鮮諸国

の制度を導入し、それによる支配力の強化を目指したものである。

2 七世紀中・後期の阿波国

以上の全般的な動きをふまえ、阿波地域における地方行政組織としての評の成立・展開の過程を見ていく。評は国造の支配する「クニ」を基盤に編成されている。阿波の場合、吉野川下流域の粟凡直国造のクニ、勝浦川・那賀川・海部川流域の長国造のクニ、および吉野川上中流域の佐伯直氏のクニの三つが存在していたとされている。

イ 吉野川下流域について

『続日本紀』神護景雲元年（七六七）三月一六日条に「阿波国板野、名方、阿波等三郡百姓言曰、己等姓、庚午年籍被記凡直、唯籍皆着費字、自此之後、評督凡直麻呂等披陳朝廷、改為粟凡直姓已畢、天平宝字二年編籍之日、追注凡費、情所不安、於是改為粟凡直」とあり、六六〇～七〇年代に板野・名方・阿波三郡すなわち吉野川下流域全域の「評督」に粟凡直麻呂がついている。さらに、名西郡石井町中王子神社に所蔵されている「阿波国造碑」に「阿波国造名方郡大領正□（七）位下粟凡直弟臣墓・養老七年歳次癸亥年立」とある。養老七年（七二三）という日本でももっとも古い墓誌の一つであり、八世紀初頭に粟凡直氏が名方郡大領であったことが分かる。第三に、藤原京から板野評と記された木簡が出土しており、六九〇年代には板野郡の前身としての板野評の存在が確認される。

この三者との関連で、伊予国の豪族である別君氏について、その系図（『和気氏系図』、九世紀後半に円珍がつくらせたもの、その信憑性は高い）によると、評造一評督一郡大領の三代にわたる系譜があらわれている。これは孝徳期（六四〇～五〇年代）一天智・天武期（六六〇～八〇年代）一大宝令以降（七〇〇年以降）に対応するとされている。この別君氏の動向と対応させると、粟凡直氏の動きについても、孝徳期の評造粟凡直某（氏名不詳）一天智・天武期の評督粟凡直麻呂一大宝令以降の名方郡大領粟凡直弟臣という、律令国家形成過程における三代の歩みが浮かび上がってくる。

問題はこの評造・評督がどの評の評造・評督であったのかである。『続日本紀』では粟凡直麻呂がどの評の評督か記していない。名方郡にひきつければ、板野評が存在していることから見て、名方評の評督とみることができる。一方『続日本紀』によれば、評督の粟凡直麻呂は名方・板野・阿波三郡全体の百姓を代表して行動している面がうかがえ、その側面をとれば三郡で構成される吉野川下流域全体が一個の評となっており、その評の評督とみすることもできる。この場合は孝徳立評時点で、一個の評であったのが、七世紀後半の過程で三つの評に分割されたことになる。

ロ 吉野川上中流域

この地域については、観音寺遺跡から「麻殖評伎珥穴二升」と記された木簡が、飛鳥池遺跡から「三間評□小豆…」と記された木簡が（いずれも七世後半）出土している。後の三好・美馬・麻植三郡からなるこの地域は讃岐の影響が強く、五～六世紀の段階で佐伯直氏を国造とするクニが存在していたが、七世紀後半には二つの評に分割されていた。

『日本霊異記』の説話「遭兵災信敬観音菩薩像得現報縁」に伊予国の豪族が白村江の戦で捕虜になったが佛の加護で帰還できたので「建郡造寺」と記されている。朝鮮出兵に多くの瀬戸内の豪族・農民が動員されたことはまちがいない。それだけに白村江の敗戦の影響は大きい。霊異記が説話であるが伊予に素材をとっているのはそのあらわれであろうし、松原弘宣らは伊予においては白村江の敗戦以降に全面的・本格的な立評がおこなわれるとする。讃岐を通して瀬戸内海の影響を受ける当地域もこの敗戦に強い影響を受けたであろう。そして当地域の場合、現美馬郡に郡里廃寺が存在する。白鳳期建設の法起寺型式の寺院であり、美馬郡の中心部に立てられている。そのことをふまれば、孝徳期に立てられた評が、白村江敗戦以降の激動のなかで、あらためて三間・麻殖の両評に再編されたこと、三間評の成立に対応した形で郡里廃寺が建設されたとみてよい。

ハ 勝浦川・那賀川・海部川流域

『続日本紀』宝亀四年（七七三）五月七日程に「阿波国勝浦郡領長費人立言、庚午之年、長直籍皆著費之字、因茲前郡領長直救夫、披訴改注長直、天平宝字二年、国司従五位下豊野真人篠原、以無驗記更為長費、官判依庚午籍為定、」とあり、この南部地域でも、同時期の吉野川下流域と似た過程がたどられていることが推測されるが、史料がこれ以外になく詳細は不明である。

長郡が那賀郡と勝浦郡とに分割されるのは七一〇年代であり、七〇二年に評が郡に編成替されたときに長評が長郡になったと見るべきである。その点で、七世紀の段階で、吉野川流域で見られような評の分割・再編はこの地域では起こっていなかったと推測される。また、評の成立そのものも、孝徳期であるか、天智・天武期に下がるのかも不明である。

まとめ

七世紀中・後期という日本の律令国家の形成過程における阿波国の政治動向を見る場合、百済救援や白村江での敗戦という東アジア情勢の激動と切り離して考えることはできない。吉野川上・中流域の場合、その影響を受けていることは一定明らかにしうるが、吉野川下流域及び阿波南部地域については、その影響をうかがいうる直接的な史料はみあたらない。

しかし、評という地方行政組織のあり方の変遷という面からいうと、東アジアにおける戦争と内乱の周期の第二段階（孝徳期）という激動のなかで、阿波という地域においても、国造のクニを基盤にした評の編成がなされ、さらにその評は白村江の敗戦以降の戦争と内乱の周期の第三段階（天智・天武期）においては、地方行政機構の組織強化という面からの再編成がなされるという過程が進むとみてよいのである。

庄・蔵本(徳大構内)遺跡出土の無文土器系土器をめぐって

— 縄文から弥生への変化を一地方の視点から考える —

中村 豊

(大学解放実践センター)

西日本における縄文時代から弥生時代への変化は、遠賀川式土器と水稻耕作、大陸系文化の普及として一般的には説明されている。しかし、そのあり方は各地域で多様な姿を示している。徳島地域でもそうであって、概説書に描かれている北部九州や近畿地方とは異なる地域色を持っている。今回の研究会のテーマが「古代東アジアをめぐる国際環境」であるため、朝鮮半島の「無文土器」に類似した土器を取り上げるけれども、これに偏った視点ではなく徳島の特殊性を活かした報告をおこないたい。

弥生時代前期の西日本には、遠賀川式土器とよばれる斉一性の高い土器が、若干の地域色をもちながらも広く普及している。今回の検討対象である「無文土器」は、この遠賀川式土器の範疇におさまらない口縁端部に粘土紐を貼り付けたもので、「粘土帯土器」と呼称され、「無文土器」の後半に属している。ところが、この「粘土帯」を西日本の最終末の縄文土器である突帯文土器の痕跡や、弥生時代前期末・中期初頭の「瀬戸内型甕」の原型と考えることもできる。

徳島大学蔵本地区にある庄・蔵本遺跡の位置する吉野川下流南岸には、縄文時代から弥生時代へと変遷する時期に、名東遺跡、三谷遺跡、鮎喰遺跡を合わせた4遺跡が眉山北麓の微高地上に立地している。それぞれがわずかに数100mの距離に展開しており、小地域の実態を把握するのに良好なフィールドである。この、4遺跡は、時間的に重なり合いながら展開する。突帯文土器最終末から、突帯文土器と遠賀川式土器が併存していたころは、眉山北麓の微高地上に、比較的小規模の集落が点々と重層的な景観を呈していたと考えられる。その後、蔵本地区周辺に拠点的な集落が形成され、人々はここに集まり、従来の伝統的な集落景観は終わりを告げる。

この変化をもう少し具体的にたどってみると、三谷遺跡における石棒儀礼と庄遺跡の列状を呈する墓域との対称的な姿が一例である。三谷遺跡では多数の石棒が、あたかもイヌの埋葬儀礼に用いられたかのような出土状況を示しており、縄文時代の埋葬時における儀礼を堅持しようとする意図を明確に読みとることができよう。

一方、三谷遺跡で石棒儀礼が盛行したころ、庄・蔵本遺跡では弥生前期初頭の墓域が東西2ヶ所に形成される。このうち西側の墓域は、箱式石棺墓2基・配石墓13基・甕棺墓1基・土坑墓6基からなる列状の配置をする。副葬品としては、小型の壺・鉢類と碧玉製の管玉がある。このような墓制は、西日本の縄文時代には類例が認められないものであり、東北部九州から山陰、中西部瀬戸内地域に展開する大陸起源の墓制と考えられる。

次の段階にいたって集落景観は一変する。微高地上に点々と存在した遺構は庄・蔵本遺跡へと集中・大規模化する。環濠・灌漑用水路・水田が次々と造営されたのである。眉山山裾に竪穴住居4棟が営まれた。このうち、東側の1棟からは扁平片刃石斧・石製紡錘車の未製品が砥石とともに出土しており、大陸系磨製石器の製作が本格的に開始されたことを示している。これら4棟の北側に接して2重環濠が検出されており、内側から多数の土坑が密集してみつかっている。この北側の低地に灌漑用水路・水田を営んでいる。「拠点集落」と呼びうる県内隋一の弥生集落はこの時期をもって成立したといえよう。しかしながら、こうしてできた弥生集落にも、縄文時代からの伝統的な文物は脈々と受け継がれている。たとえば、土掘り具として1種の鍬として用いられたと考えられる打製石斧や、打製石庖丁、狩猟具である石鏃や穿孔具である石錐が出土しており、これらは弥生時代を通して受け継がれていく。

以上から、徳島市眉山北麓地区における弥生集落の形成は、試行錯誤・紆余曲折を経てようやく成し遂げられたものである。縄文時代から弥生時代の移行期に、それ以前にはみられなかった規模での、大陸系文化の流入があったことは事実であるし、それに朝鮮半島からの渡来人が関わったことも否定できないであろう。しかしながら、文物ひとつひとつを客観的に評価する限り、縄文集落が渡来人からなる弥生集落に駆逐されたとはいえない。大陸系文化と縄文時代から受け継いだ文化が複雑に絡み合って成り立つところに、本地域における弥生文化成立の特色を読みとることができよう。

以上のような視点に立てば、庄・蔵本遺跡出土の土器が「無文土器」であるかは、今後、他地域の土器とも十分に比較した上で、慎重に評価しなければならないと思う。